



2016年4月24日(日)  
夙川教会主日礼拝説教



## 「不公平な現実生きる」

創世記4：1－16

### 現実是不平等である

わたしたちが生きているこの世界は、平等な世界でしょうか。それとも不平等な世界でしょうか。わたしたちはどんなときも、いつでもどこでも公平な扱いを受けているのでしょうか。それとも不公平だと言わざるを得ないのが現実でしょうか。ことわざのなかに「隣の芝生は青い」という言葉があるのは、不平等で不公平な現実をオブラートで包んでしまうためかもしれません。確かに比較すると隣の人の方がよく見える、という心理的な現象があることは確かですけれども、比較することのそもそもの始まりは、わたしたちの世界が公平ではないというところにあるのではないのでしょうか。わたしたちの現実は平等でも公平でもないのであります。「平等でなければならない」「公平であるべきだ」と声高に叫ばれるのは、現実がそうでないからであります。では、そのような現実生きるわたしたちに、神さまはどのような御心を示しておられるのでしょうか。

### 兄弟関係について

今朝の礼拝に与えられております聖書のみ言葉は、カインとアベルの物語として知られているものであります。最初の人間として神さまによって創造されたのがアダムとエバでありましたが、彼らから生まれた最初の子供が、カインとアベルという兄弟でありました。聖書の物語の中で、何組もの兄弟が登場いたしますけれども、その聖書の物語に登場する兄弟というのは、たいてい不仲であります。アブラハムの息子のイシュマエルとイサク、イサクの息子のエサウとヤコブ、ヤコブの息子の12人の兄弟たち、いずれをとっても、仲むつまじい兄弟関係にはありませんでした。ある場合には長子の特権を巡って、またあるときには親の偏愛によって、兄弟関係は壊れてしまいました。わたしたちの場合でもそうなのかもしれません。わたくしは残念ながら一人っ子ですので兄弟げんかをしたことがなく、よくわからないのであります。兄弟姉妹がおられる方々にとって、兄弟の仲というのはどのようなものなのでしょうか。年長の立場には年長の、真ん中には真ん中の、年少には年少の、それぞれ悩みや苦しみがおありであることと思えます。兄と弟、姉と妹というのはいつも比較されるものであります。兄や姉のほうが優れていても、逆に弟と妹のほうが優れていても争いの種になります。両者を比較してそこに優劣があるならば、「妬む心」がそこに生じ、火種となるのです。

この「妬む心」というのは、大変厄介なものであります。デンマークのキルケゴールという神学者は「すべての困難は比較することから来る」という言葉を残しました。これは、本当にそうだと思います。人は比較され、そこに理由のない不公平を見出した時、憤りを覚えるのであります。では、あらゆる兄弟関係がある中で、最初の兄弟はどのようなものだったのでしょうか。人類史上最初の兄弟ということであれば、それは、わたしたちが理想とするようなすばらしい兄弟関係であったのでしょうか。どうなのでしょう。

### 目を留められなかった献げもの

アダムとエバの最初の子である兄のカインは土を耕す者となりました。畑を耕し、作物を育てることによって糧を得るといふ農耕の生活であります。一方、弟のアベルは羊を飼う者となりました。牧畜の生活であります。いずれもそれぞれに自らの仕事を持ち、その働きに勤しんで暮らしていたのであります。

さて、あるとき、カインとアベルはそれぞれがそれぞれの手の働きによって得たものを、神さまへの献げものとして携えてやってきました。すなわち、カインは地の実りを、アベルは羊の初子を主に差し出して、礼拝をささげたのであります。想像しますに、おそらくこの時点までは、カインとアベルの兄弟仲が悪くて深刻な状況であったということではないはずであります。そのようなことをうかがわせる聖書の記事もありません。

ところが、そのようなところに、激しい憤りを引き起こすような問題が発生するのです。4節から5節にかけて、こう書かれていました。「主はアベルとその献げものに目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった」と書いてあります。どういうわけか、神さまは弟アベルの献げものだけに目を留められなかったのであります。いったいどうしてなのでしょう。カインもアベルも、自らの手の働きによって、正当に得たものを差し出しておりますのに、なぜか兄カインの献げものには目を留めてくださらなかったのです。不公平の種がまかれたのであります。ここに、この物語の大きな謎があります。

### カインの献げものが受け入れられなかった理由・・・3つの考え方

なぜ、カインの献げものが受け入れられなかったのでしょうか。このことについては、聖書自体は何も確証的なことを、わ

たしたちと与えてはくれています。けれども、わたしたちは、カインの献げものが受け入れられなかった理由が何かあるのではないかと想像するのであります。神さまはすべての人に公平で平等に恵みを与えてくださるお方なのだから、カインの献げものが受け入れられなかったのにはなにか理由があるに違いないと考えて、いろいろな説が考えられました。例えば「天地創造」という映画の中では、こういう解釈がなされています。カインが神さまに献げるための穀物を取り分けている時に、カインは途中で献げるのが惜しくなってきた、一部を自分の籠にもどしたのです。つまり、カインは出し惜しみをしたのだ、という描き方がなされています。これなら話はわかります。

また、ある聖書物語では、次のような描き方をしていました。毎日汗を流し、腰をかがめて辛い作業に耐えて作物の世話をする兄のカインは、笛を吹きながら楽しそうに羊たちの世話をしているアベルをそもそも快く思っていなかった。その上に、アベルの羊がカインの畑にさまよいこんで、作物を荒らしてしまったので、どうしても許すことができなかつたというふうに描いています。

あるいは、これが一番ありそうな解釈なのでありますが、3節から4節にかけて「カインは土の実りを主のもとに献げ物として持ってきた。アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持ってきた」と書かれています。この描き方からしますと、アベルの方は、自分の持っているものの中で、最上のもので、つまり肥えた初子をさしだしたけれども、カインは単に「土の実りを」とあるだけであることから、最も良いものではなかつた、本来ならその年に取れた最初の収穫、初穂を持ってくるべきだったのにそれをしなかつたのだ、と考えられなくもありません。しかし、この解釈も、確かにそれはそうかもしれないけれども、差し出したものに目を留めてくださらないほどに悪いことだとも考えられないのであります。たとえ最上のものでなくても、自ら苦勞して働いて得た収穫を差し出しているのですから、そこまでの仕打ちを受けるほど、ふさわしくない献げものだったとは考えられないのであります。

#### 故なく受け入れられなかつたとしたら

このように、わたしたちは神さまが不公平なことをなさるはずがない、という前提でこの物語を読みますから、どうしてもカインの献げものが受け入れられなかつた理由を探そうとするのであります。けれども、もしそういうことなら「カインの側に何かの落ち度があつて、それを理由に弟を妬むようになるのは自分が悪い、自業自得だ」ということになります。つまり、カインが悪いのだということです。それで終わりであります。それなら、わたしたちは、カインのような落ち度がないようにしましょう、という結論になることでしょう。

けれども、これがもし、カインの献げものが何の理由もなく、目を留めていただけなかつたのだとしたらどうなるでしょう。カインは確固たる理由もなく、神さまにかえりみていただけなかつたのだとしたらどうなるでしょう。そして、むしろそのように読むことが、一番自然な読み方ではないでしょうか。聖書に書いてある通り、神さまは理由があつたわけではないけれども、アベルの献げものを受け入れ、カインの献げものを受け入れられなかつたということです。もちろん、わたしたちの思いをはるかに超えた神さまのお心の中には、理由があつたのかもしれませんが、けれども、わたしたちの目に見える現実においては、そこになんかの理由も、さしたる根拠も認められないのです。まるで神さまがえこひいきをしておられるとしか思えない、そういう状況なのであります。そして、だからこそ、カインは怒り心頭に達したのではないのでしょうか。ゆえなく拒絶された故に怒つたのであります。もし、カインの方に何か落ち度があつたのだとすれば、出し惜しみをしたのが悪かつた、最も良いものを献げなかつたのがいけなかつた、と納得せざるを得ません。アベルを殺してしまわなければ取まらないほどに、カインの怒りが燃えたのは、理由もなく受け入れられなかつたため、不公平な扱いを受けた故ではなかつたと思うのであります。

#### 不公平な神？

そしてそれならば、わたしたちにも同じような苦い経験があるのではないのでしょうか。さしたる理由もないのに、自分は除外されている。受け入れられていない。いつも兄や姉だけが、あるいはいつも弟や妹だけが受け入れられ、可愛がられている。自分だけのけ者にされている。日が当たらない。そういう苦しみを知っているのではないのでしょうか。いつも自分だけが損な役回りを演じさせられている、そういう思いは誰しもが持つておられるのではないのでしょうか。

自分のことだけではありません。世界に起こる出来事には、理由もないような悲劇があります。どうしてこのような苦しみ、悲しみが自分に、自分たちに襲いかかってくるのか。なぜわたしは、このような病にかかってしまったのだろうか。人は、苦しみの理由がわからない時、その苦しみがより深くなるのであります。いわれのない悲しみが不可解という闇に包まれてしまうと、その悲しみの深さはより深くなるものであります。そしてその深い悲しみの中で、激しい復讐の心が芽生えていることに気がつきません。それだけ闇が深いからであります。そしてその憤りはいつしか神さまに向けられることになるのです。「神さまどうしてなのですか」と。

しかしながら、神さまのなさり方がわたしたちには不公平に見えるというのは、主イエスの喩えの中にもございます。「ぶどう園の労働者」のたとえでは、朝から働いたものにも、夕方から働いたものにも、同じ1デナリオンが支払われたのでした。たくさん働いたものにも、わずかししか働かなかつたものにも同じ賃金を支払った主人のその気前の良さというのは、わたしたちの目から見れば不公平そのものなのではないのでしょうか。わたしたちが同じ扱いを受けたならば「どうして朝から働いたわたしたちが、夕方から働いたこの連中と同じ賃金なのか」と文句を言うはずであります。この譬にも表れておりますように、神さまはわたしたちに対して自由にふるまわれるのであり、その神さまの振る舞いのゆえに、わたしたちは混乱させられ、ついに神さまから顔を背けてしまうのであります。

### 顔を伏せるカイン

自分が献げた献げものが受け入れられなかったカインは、そこで激しく怒って顔を伏せました。もはや神さまのほうを向いていられなかったのです。怒りが関係を断絶してしまうと、もはや顔と顔をあわせることができなくなるのです。

すると、そのようなカインの様子をご覧になられた神さまはカインに次のように語るのです。「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか」と。ここで神さまはカインのその怒りが本当に正しいのかと問うておられるのであります。そして、わたしたちはこのカインの思いが痛いほどわかるのです。カインの怒りは当然でありましょう。

しかし神さまはここで、単にカインをとがめておられるのではありません。神さまは「お前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか」とおっしゃっています。つまり「顔を上げよ」とおっしゃっておられるのです。「このわたしの前から離れないで、不公平な現実の中で、理不尽な現実の中で、顔を上げて生きてみよ」とおっしゃっておられるのであります。「あなたがたが置かれている世界の現実には、あらゆる不公平、不条理、不平等が満ち満ちている。そういう現実の中で、持たざる者は持つものを妬み、持つものは持たざるものを軽んじてしまう。そういう世界の中で、怒りで顔を伏せてしまうのではなく、顔を上げてわたしに向けてみよ、そして妬み心に支配されることなく、不平等の現実を生きよ」とおっしゃっておられるのであります。

### 命令ではなく約束として

神さまは続いてこう語っておられます。「正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない」と。「正しくないなら」といわれますが、これはまさにわたしたちのありのままの姿です。わたしたちは神さまのまえに誰一人正しい人はいません。神さまは「正しくないなら」といわれますが、わたしたちはみな、正しくないのです。そして、そのような正しくないわたしたちに告げられた言葉が「罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない」という命令なのであります。「罪」というものがまるで人格をもってあたりをうろついており、わたしたちを付け狙っている。そして罪の虜にしてしまおうと、虎視眈々と狙っている。けれども、あなたがたは罪に支配されず、逆にそれを支配しなければならないのだと命じられているのです。

ところで、この「支配せねばならない」という語り方ですが、この日本語の聖書では命令形になっています。ところが、この訳し方については諸説ございまして、もともとの言語であるヘブライ語では、確かに命令形にも訳せるけれども、未来系にも訳せるというのが有力な説であります。原文がはっきりしないのです。ですから、どっちが正しいかということではなく、「支配せねばならない」ではなく「支配するだろう」という意味もあると考えてよいのだと思います。つまり、神さまはわたしたちに、罪に負けるな、と叱咤激励しているというよりも、約束をあたえてくださっているのだということです。「あなたがたは、罪に負けることはない、いずれそれを支配するようになるだろう」という約束であります。そしてそれは、主イエスの十字架と復活の恵みによって、わたしたちはもはや罪に支配されることなく、逆に支配することができるものとされているのであります。

けれども、罪を支配するとはどういうことなのでしょう。このカインとアベルの物語の中では、こういうことになります。それは、兄として弟を正しく扱うということです。つまり、神さまの不平等な扱いというのは、不公平な現実を表します。その不公平な現実の中で怒りを燃やし、弟をこの世界から消し去ろうとするのではなく、逆に弟を守り、生かすことであります。神さまは、カインに対して兄としてふさわしい、あるべき関係を持つことを求め、期待しておられるのです。たとえ理由のない不公平な現実の中におかれていても、妬み心に支配されずに弟を扱うことを期待しておられるのであります。

### 守りのしるしを刻まれた者として

カインの姿は、ほかの誰のことでもありません。わたしたちはみなカインの末裔としての姿を持っているのではないのでしょうか。神さまの期待に対して、わたしたちはいつも神さまの期待に添うことができないのであります。現実のわたしたちもそうではないのでしょうか。神様のお心を知っているにもかかわらず、そうすることができないのです。こうしたほうがいいとはわかっているけれども、できないのです。カインもまたそうでありました。

しかしながら、そのカインにも、神さまは恵みを与えて生かし続けてくださるのです。神さまは、殺人という重い罪を負ったカインに対しても、その慈しみを注ぐことをおやめにはならなかったのです。主のみ前から追放されたらたちどころに殺されてしまうと怯えるカインに「カインを殺す者は、だれであれ七倍の復讐を受けるであろう」と約束され、そして、神さまはカインに出会うものがだれもカインに危害を与えないように「しるし」をつけてくださいました。「この者はわたしの慈しみに生きるものであり、この者に危害を加えるものは、わたしみずから七倍の復讐を与えずにはおかない」そのような守りのしるしを与えてくださったのであります。それが、わたしたちにとっては「洗礼」という目に見えないしるしなのであります。神さまの御心を知らされながら、なお御心にそむくわたしたちが、それでもなお、この世界で神の憐れみによって生きてゆくための守りのしるしを刻まれて、わたしたちは不公平な現実の中を歩んで参りたいと思います。